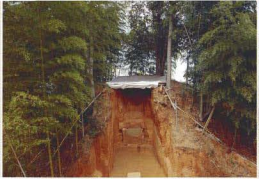
高松塚古墳の調査

文化庁
奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
奈良県立橿原考古学研究所
明日香村教育委員会

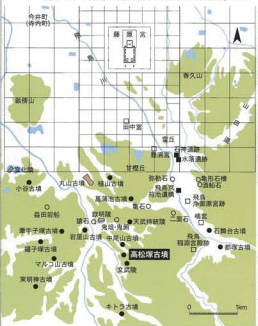
▲元禄年間の高松塚（奈良県立奈良図書館蔵『諸陵考』より）



▲壁画発見直後の高松塚

▲発掘調査前の高松塚

▲調査用覆屋の建設風景

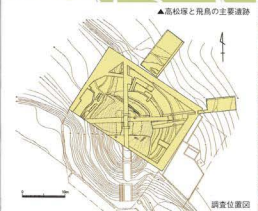


▲高松塚と飛鳥の主要遺跡

▲墳丘部（昭和47年発掘区の埋め戻し状況）

▲調査区全景（墳丘北半部）

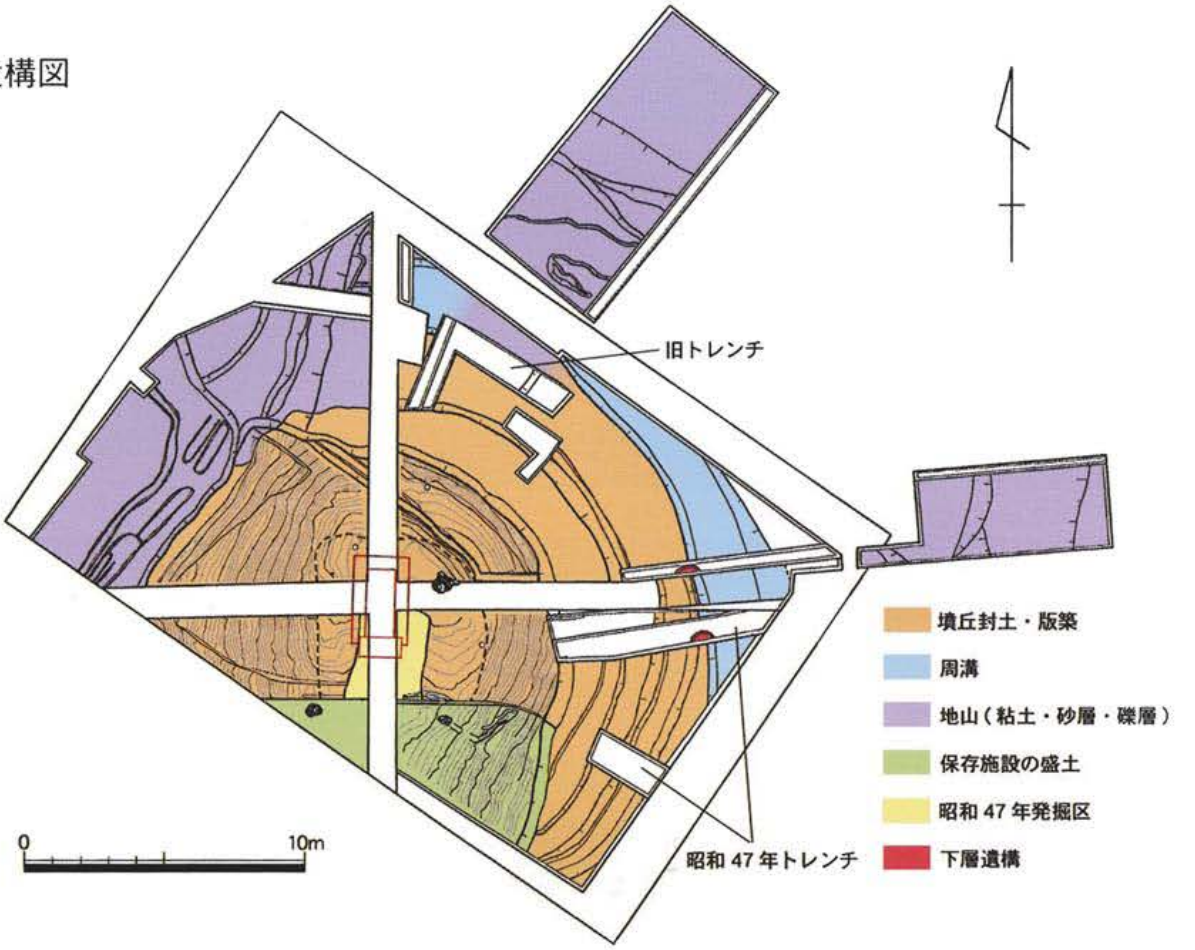
▲丘陵南斜面の開削状況

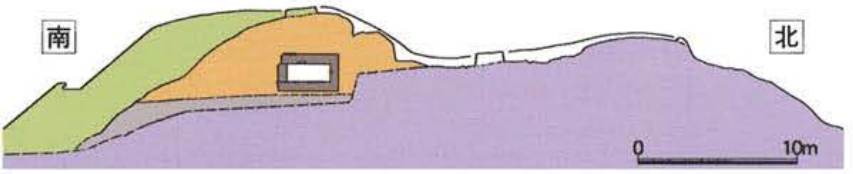


▼調査区全景（墳丘東半部）

▼墳丘の東～北縁をめぐる周溝

調査遺構図





南北断面概念図

調査の経緯　昭和47年、明日香村平田にある高松塚古墳から、色あざやかな男女の人物群像や四神、日月、星宿の壁画が発見され、全国に驚きと感動を与えました。

この貴重な壁画を保存するため、文化庁は昭和51年に保存施設を建設し、壁画の修理と定期点検を継続してきました。しかしながら現在、石槨内への虫の侵入とカビの発生が、壁画保存に深刻な事態をもたらしています。

このため、「国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策」検討の一環として、30年ぶりに古墳の発掘調査を実施することになりました。調査には奈文研、橿考研、明日香村が共同してあたり、壁画保存に影響を与えないように、巨大な仮設覆屋内で発掘作業を進めています。

調査成果　**墳丘**：東西に延びる丘陵の緩やかな南斜面に築造された古墳は、これまで直径18m、高さ5.4mの円墳と考えられてきました。今回、墳丘裾をめぐる周溝の発見により、直径が23mの円墳であることがわかりました。また版築の観察から、墳丘が上下二段に分かれ、上段の直径が約18mになる可能性が考えられます。

墳丘は、南の丘陵下からみると８m以上の高さがありますが、北の周溝底面からの高さは3.6mほどです。墳頂下約2.5mの位置に、凝灰岩切石を組み合わせた石槨（内法寸法—長さ2.66m,幅1.03m,高さ1.13m）があり、その周囲は土を３㎝前後の厚さでつき固めた版築工法で築かれています。墳丘は中世以降に徐々に削り取られて、下段の墳丘はほとんど失われ、上段の墳丘も直径15mほどに小型化しています。特に墳丘の北東斜面は、大きく階段状に削られています。

周溝：北から東の墳丘裾部に、幅３m前後、深さ0.5m以上の溝が残っていました。溝底は南に傾斜しており、地形の高い北を起点に、墳丘裾にそって東西に溝を巡らせ、尾根筋の水を丘陵下に排水した施設と考えられます。西側の周溝は、畑地造成によって削平されていました。

出土遺物：古代と中世の土器（瓦器）が出土しています。古墳の下の遺物包含層から７世紀中頃の土器が、版築の最下層から藤原宮期（694～710年）の須恵器蓋が出土し、古墳の築造時期を推定する有力な手がかりとなりました。

まとめ　調査によって墳丘の規模や形態、古墳の築造方法や後世の改変の状況が明らかになりました。今回の調査成果は、壁画の恒久保存方法を検討する上で、重要な基礎資料となります。　（2005年2月）

EDITED BY K.MATSUMURA・T.INOUE・A.OKADA